

東日本大震災津波で 消えた 小さな命を想う

動物たちの心と人との心をつなぐ
やさしい絵画と
小さな命を想う
心温まるメッセージ



岩 手 県

東日本大震災津波で 消えた 小さな命を想う

動物たちの心と人との心をつなぐ
やさしい絵画と
小さな命を想う
心温まるメッセージ

岩 手 県

献辞

この本を私たちに無償の愛を与えてくれた小さな命と
そのいとおいしい思い出に捧げます。

目 次

はじめに

岩手県沿岸広域振興局保健福祉環境部長 藤尾 修・ 4

『動物も人間と同じ、たった一つしかない大切な命』

「震災で消えた小さな命展」代表 うさ・・・ 6

「東日本大震災津波で消えた小さな命を想う」発行に寄せて

社団法人岩手県獣医師会 会長 多田 洋悦・ 8

震災を風化させない、物言えぬ動物たちのために

動物いのちの会いわて代表 下机 都美子・・・ 10

絵画作品及び心温まるメッセージ

- ✚ 1 「**チョコちゃん、モモちゃん**」 (絵：北沢 優子先生)
千崎 妙子さん (宮古市)・・・ 14
 - ✚ 2 「**マックスちゃん**」 (絵：市原 淳先生)
山本 静子さん (宮古市)・・・ 16
 - ✚ 3 「**インコちゃん**」 (絵：タカタ カヲリ先生)
佐々木 美代子さん (釜石市)・・・ 18
 - ✚ 4 「**エピキュアちゃん**」 (絵：たかしま なおこ先生)
六串 恵子さん (大槌町)・・・ 20
 - ✚ 5 「**クリームちゃん、ワカメちゃん**」 (絵：たかぎ なまこ先生)
小国 和歌子さん (大槌町)・・・ 22
 - ✚ 6 「**マルちゃん**」 (絵：川浦 良枝先生)
漣磯 信子さん (宮古市)・・・ 24
 - ✚ 7 「**テン、マック、ミー子、アニキ、ゆめちゃん**」 (絵：永盛 綾子先生)
岩間 有希枝さん (大槌町)・・・ 26
 - ✚ 8 「**カレンちゃん、ショコラちゃん、他たくさん家族たち**」 (絵：うさ先生)
後藤 真美さん (大槌町)・・・ 28
-

(表紙 「同じ星空を見た夜」 うさ先生)

はじめに

岩手県沿岸広域振興局保健福祉環境部長 藤尾 修

本書の発行にあたり、震災で消えた小さな命展代表の「うさ先生」の次の言葉に感銘を受けたことを思い出しました。

「今回の東日本大震災津波で家族同様の動物と別れ、辛い思いをしている方々がいます。

亡くなった命の中には、動物であるということで、避難の網からもれて、失われた命もあります。

津波で亡くなったたくさんの動物たちの命も、その命を想う人にとっては、みんな等しく大切な命です。

亡くなった動物たちの心と飼主さんの心を絵によって、つなぐことができたなら、そして、「命は等しく大切だ」ということを、また、「一人一人の心がけ次第で、救える命がたくさんある」ということを皆さんの心に投げかけたいと思います。」

今回、国内外の絵本作家の先生方等の全面的なご協力をいただき、

絵画展にこめた先生方の思いや飼主の方々の思いを広く皆様にご紹介することで、動物が「命あるもの」であることに鑑み、「人と動物の共生」や「人と動物がよりよい関係を築ける社会」を目指して、岩手県環境生活部の監修のもと、本書を作成しました。

動物は、私たちに「深い感情」や「慈しみの心」、そして、「癒し」や「安らぎ」を与えてくれます。

それは、動物が人間と同じように喜んだり、悲しんだりする感情を表現してくれているからかもしれません。

ことばが話せない動物の命を尊重し、ともに仲良く暮らしていくためには、私達が、動物の心を推しはかろうと努力することが大切だと思います。

いわば、動物の「Quality Of Life」の向上について、皆様といっしょに考えていくことが大切なのではないかと思います。

それができれば、人として「優しい思いやりの心」を持てるのではないのでしょうか。

皆様のご理解とご協力をいただき、当地域の、ひいては、岩手県、そして、全国の「動物愛護に係る取組」をいっしょに進めていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

『動物も人間と同じ、
たった一つしかない大切な命』

「震災で消えた小さな命展」代表 うさ



2011年3月11日、東日本大震災が起きました。

その後、私は何かできることはないかと、被害の大きかった地域に行きました。

そこで、支援物資の配達などを手伝い、あらためて被災者の方の悲しみや苦しみを知りました。

同時に知ったのが、犠牲になったたくさんの命の中に、様々な動物の命があったことでした。家族同様のペットと別れ、悲しい思いをしている方々とお会いしました。恐ろしい津波からせつかく助かったのに、動物であるという理由で避難の網からまれて失われた命もあるとききました。

私の大切な家族にも、動物がいます。そのような話をきいて、心が引き裂かれそうになりました。

亡くなった動物たちは、大好きだった飼い主さんが自分のことで辛い思いをしていることを、きっと、とても心配しているでしょう。

動物たちと飼い主さんの心を、私たちが描く絵によってつなぐことができたら、と思ったとき「震災で消えた小さな命展」の開催を決めました。

そしてこの展覧会を通して、『動物も人間と同じ、たった一つしかない大切な命』ということ、多くの人に伝えたいと思いました。

大切なのは、ひとりひとりの心・・・命に対する思いです。

いつか、目の前の動物の運命を決める立場になり、その小さな命の行き先を判断する時、「震災で消えた小さな命展」を思い起こしてくれることを願います。

そして、人も動物も同じ命だと、誰もが当たり前に見えるような、そんな世の中になっていくことを祈っています。

「東日本大震災津波で消えた小さな命 を想う」発行に寄せて

社団法人岩手県獣医師会 会長 多田 洋悦

千年に一度といわれる東日本大震災により岩手県では六千名近い方々が犠牲となり、津波にさらわれた動物も数千頭に上ると推測されます。

この度、震災によって尊いいのちを失った動物たちの家族のみなさんの想いがこめられた感想文が多く作家の方々による絵画とともに文集として発行されることにつきまして心より感謝とお礼を申し上げます。

大震災では、家族の一員である動物と一緒に幸せに暮らしていた多くの飼い主のみなさんが、一瞬にしてペットロスの状態となり言葉に表すことができない傷を心に負いました。動物たちを失った辛さを口にすることができず、未だに悲しみは癒えてはおりません。

震災後に改めて思うことは、私たちは地震と津波とともに犠牲になった動物たちを決して忘れてはならないことです。もう一つは、大震災の復旧と復興、ふる里いわて再生の道程は決して短くはありませんが、動物たちを失ってしまったみなさんが、いつの日かまた新たな「いのち」に手を差し伸べ、一緒に生きていくことができる日が必ず訪れるように獣医師会としてお手伝いをすることです。

家族の一員として、仲間、友だち、かけがえのない伴侶として生きがいと安らぎの心をもらい、幸せな時間をともに過ごしてくれた動物たち…。

あなたがたは感性が鋭いために、私たちが想像する以上に地球の地鳴りや津波の押し寄せる轟音が怖かったことでしょう。2年近い時間が経過してしまいましたが、あらためてあなたがたに感謝のことは捧げます。

私たちは誓います。あなたたちを決していつまでも忘れません。そして、新しい「いのち」と出会い、愛する心を注ぎます。あの時を忘れず、この鎮魂を胸に刻み、ともに前をむいて歩いていきます。どうか新しい世界で今まで以上に幸せな生活を送ってくれることを心から祈ります。

最後に、本書が多くの被災されたみなさまの気持ちに優しく寄り添い、心のケアとなり、動物たちへのレクイエムとなってほしいと心から願うとともに、発行にご尽力いただきました関係者の方々に感謝と御礼を申し上げます。

**震災を風化させない、
物言えぬ動物たちのために**

動物いのちの会いわて代表 下机 都美子

一昨年、私たちは東日本大震災という大きな禍に遭遇し、ただ呆然と立ちつくし受け入れるしかありませんでした。誰もがいつかは有りえるだろうとは思ってはいたものの漠然とした危機感だったことをどんなにか悔やんだことか。

そして、その震災で犠牲になった多くの御霊の中にたくさんの動物のいのちがあったことを知りました。

私たちにたくさんの笑顔・勇気・希望を与えてくれた小さな命たちを思う時、なぜ救ってあげられなかったのかと悔やみ、嘆き、その時から時間が止まってしまった多くの家族を前にしました。残された人たちがやるべきこと、やれることを探し、全国から様々な手が差し伸べられました。その中に残された飼い主の思いを受け止め、人間と動物の心を描く「震災で消えた小さな命展」がありました。一つ一つの作品が明るく、愛情をいっぱい注がれ家族と暮らしていた昨日がよみがえるような作品でした。

そしてそれは残された家族に、感謝と勇気を与えてくれるものとなりました。

この企画は、多くの絵本作家や画家・イラストレーターの方々が趣旨に賛同され、全国で展示会が開催されているということで、震災を風化させない、物言えぬ動物たちのために被災時の動物救護の有り方に一石を投じる役割をはたしておられることに感謝申し上げます。

動物保護団体である私たちは、岩手県の「動物緊急マニュアル」に則って動物保護の後方支援団体として、生き延びた動物の保護に力を入れてまいりました。決して被災地は復興したわけではありません。救うべき小さな命はたくさんあります。

今回の展示会や本書を通じて、いのちの大切さ、動物愛護に関する啓発がさらに推進されることを願ってやみません。

絵画作品
及び
心温まるメッセージ

「千ヨビちゃん、モモちゃん」

(絵：北沢 優子先生)



飼主さんからのメッセージ

千崎 妙子さん（宮古市）

あの日あの時が最期の別れになるなんて・・・全く想像していませんでした。津波が去った後「津波怖かったよね」と話したくてもお母さんとチョコビはもういません。あの時どんな気持ちだったのか・・・考えると苦しくなります。

車を運転していて時々思うことがあります。震災前、いつもどこかへ出掛ける時は助手席にはお母さんとチョコビがいたなあと。そして色々と思い出します。一緒に散歩したこと、遊んだこと、旅行に行ったこと、病気をして手術したこと、毎日一緒に布団で寝たこと、そしてそのぬくもり。お母さん、チョコビがいるのが当たり前だった日常はもうありませんが私の心の中にずっとあります。

津波から逃れることが出来たモモとの別れもあまりにも突然でした。田老の実家跡地前で交通事故に遭うなんて・・・。モモはチョコビとお母さんに会いに行ったのかもしれませんが。

チョコビ、モモ、お母さん、今までありがとう。またいつか会おうね。

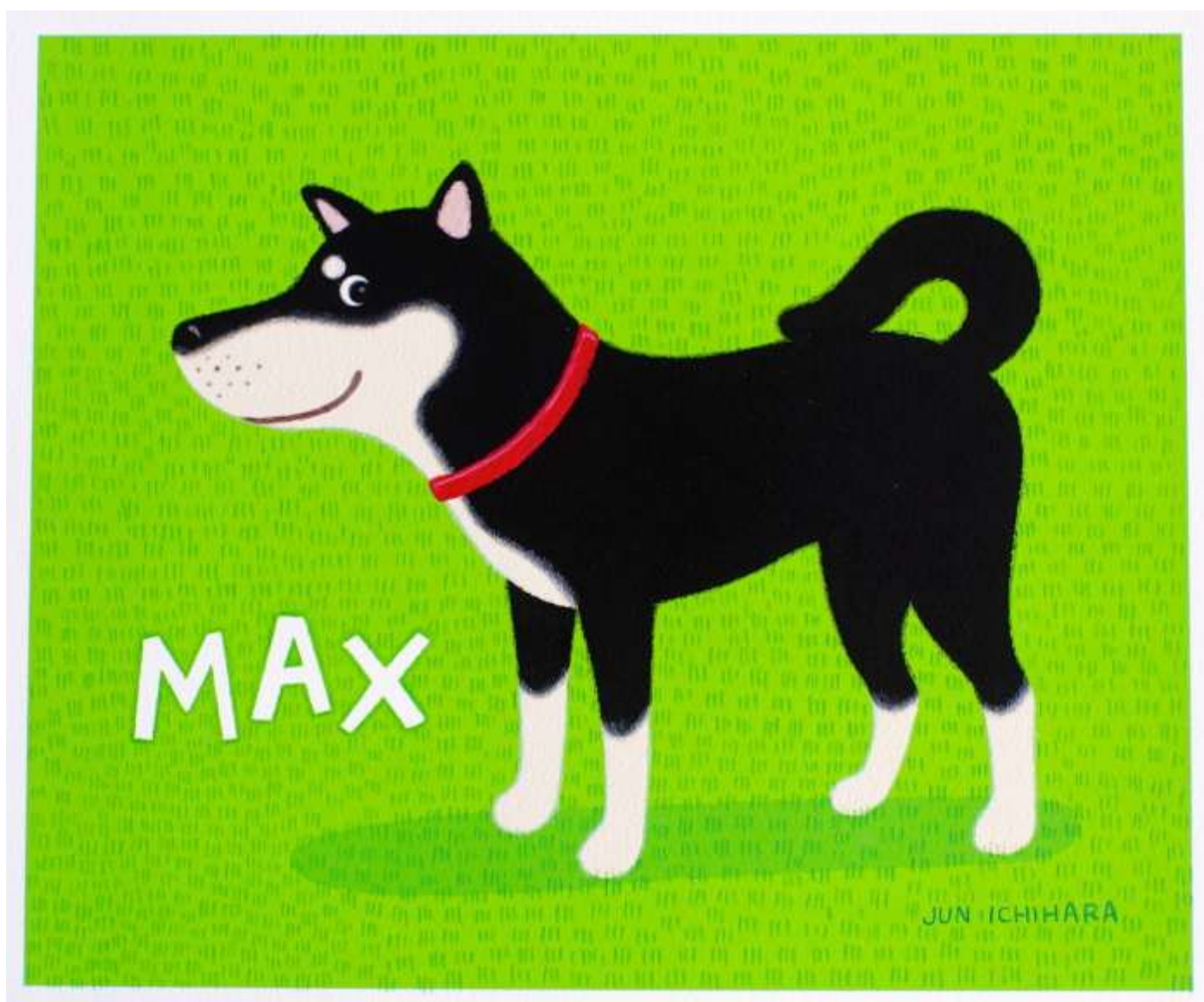
今回絵になったチョコビ、モモ、お母さんを見て安心しました。チョコビたちはきっとあの絵のように天国で穏やかに過ごしているのかなあと、そう思えたら嬉しくて私も笑顔になりました。

「震災で消えた小さな命展」を企画・開催し、依頼を引き受けてくださったうささん、そして絵にしてくださった北沢さん、この展覧会に関わる全ての方々に感謝しています。本当にありがとうございました。

私は震災で消えた小さな命を決して忘れません。

「マックスちゃん」

(絵：市原 淳先生)



飼主さんからのメッセージ

山本 静子さん（宮古市）

マックスは津波には逃げて助かりその後避難先が三ヶ所変わりました。

最初の一ヶ月あまり過ごし、その時は外で寒かったとは思いましたがマックスにとっては人々が皆よくしてくれて寂しくはなかったと、二ヶ所目からは車の中だけになり一日一日がマックスには耐えられなく、ストレス脱水症状等が色々と体にのしかかり弱くなっていたのではないのでしょうか。

マックス、自分の家にいてのんびり楽しく暮らしていたならまだ亡くなる事はなかったでしょう。

避難先の食事も人間と同じ物を最初は食べていた。

だんだんに食べなくなってきました。

三ヶ所目ではほとんど車の中、あと十五、六日で仮設に入る事が決まってマックスともう少しで暮らせる所でした。

マックス頑張ろうなどと励まし合い口々に言っていた。

亡くなる五月は暑く車の中は大変、窓は開けてもむっとする、これでは苦しいよなあと声をかけて、やり過ごす事だけが情けなくなった。

この日、朝から体調はよくなかったのではと、その日はなんとなく一日中マックスを見る様になっていた。

異変を感じ見てみるとマックスは横になり息継ぎも苦しく、私達が気づかないままいると苦しんだまま亡くなったかと思うと涙がいっぱい、心が痛み悲しく後悔したでしょう。

夕方になり苦しさはましてくる。

数人が集まって来てくれてマックスがだめな様子を早く気づいてやって良かったと思いました。

マックスマックス死ぬな死ぬな何度となく声をかけてやって水を含ませてやったら楽になった。

顔も体も安心したかのように落ち着きこのまま誰も見てやらなかったら苦しいまま亡くなったかと思うとまた悲しくなった。

マックスも楽になり体をのぼしたりああ大丈夫と思ったがそのまま静かに息をひきとりました。

マックス亡くなる二、三日前に自分の物が何もない事をさどした様にガレキの中から正面向の大きな写真が見つかりました。

かなり写真は傷んでおり今は部屋に飾って写真に向い話をしています。

「インコちゃん」

(絵：タカタ カヲリ先生)



飼主さんからのメッセージ

佐々木 美代子さん（釜石市）

我が家のインコは、水色のセキセイインコです。玄関で飼っていたので、いつも家族の送り出しとお迎えが日課でした。時々ドアの開く音を真似して、誰かが茶の間から出てくると、嬉しそうに羽根をバタつかせながらさえずる、お茶目なインコでした。

末娘が、いつも話しかけながらエサ吹きや水替をして、声をかけてから登校するので、誰よりも末娘になつていました。

3月11日、娘と家にいる時に、あの大きな地震がありました。家が高台に建っていたので津波への危機感は薄く、山の上に避難した人達に大きな声で叫ばれてから、娘と2人で山へ上った直後に、大津波が襲ってきたのです。最初のひと波でたくさんの家々が流され、私の家も玄関で飼っていたインコも、一瞬で沢の奥の方に押し込まれていきました。

津波が去ってから、ガレキの山を歩き回ってどんなに探しても、小さな鳥カゴは見つけられませんでした。

置き去りにされた悲しさを思うと、私がこの手で殺したように思えてくるのです。

そんな辛い気持ちの時に、この絵と出会いました。絵の中のインコは、玄関で家族を見守っていた頃そのまま、やさしい目をしています。私や家族があなたを失った寂しさを癒しに、ガレキの中からもどってきたように思えて涙が止まりませんでした。

ごめんなさい。そして、ありがとう。

「エピキュアちゃん」

(絵：たかしま なおこ先生)



飼主さんからのメッセージ

六串 恵子さん（大槌町）

エピちゃん

可愛く愛らしい新しい家族が、家に来たのは、10年前の10月に、おっとりとして人なつこいシーズ犬のエピキュア2ヶ月の子犬でした。はじめは、とまどいながらまさに子育てそのものでした。平凡な日々が過ぎようとしていた三月十一日の東日本大震災まさか私達が住んでいる町にこんな大きな被害を及ぼす津波が来るとは・・・私は二人（犬）子供達と一人ずつ連れ高台に登りました。夜になり波がひいたことを確認し避難場所も狭く犬の嫌いな方もいると思い胸に抱き高台から我家にもどる中エピキュアとともに肩まで波につかり大規模半壊の家に月あかりをたよりにたどりつきましたが、ガソリンや灯油が浮いている中エピキュアと入り必死に家にたどりつきました。水は断水、電気は停電お風呂にも入れず二十日ほどすぎ電気や水が普及し本当にありがたくシャンプーをしてあげたことが思い出されます。もとより病気をもっていたエピでしたので津波に入ったことが原因で感染症をおこしたのでしょう。一生懸命病院にも連れて行きましたが、十八日間の介護の末寝るごとく今年(平成二十四年)の二月七日に永眠してしまいました。淋しいとか悲しみより苦しみからときはなされエピの寝顔（死に顔）に本当にエピキュアにはありがとうと感謝の気持ちで一杯でした。「ありがとう」私のところに来てくれていやしてくれたり、なぐさめにもなり楽しい日々を・・・又今度生まれ変わってもエピキュアで戻ってきてね。たくさん抱きしめてあげるから、お母さん達を見守って下さいね。本当に本当にありがとう楽しかったね。

エピちゃん

「クリームちゃん、ワカメちゃん」

(絵：たかぎ なまこ先生)



飼主さんからのメッセージ

小国 和歌子さん（大槌町）

大切な命

小国 和歌子

鵜住居の実家にいた猫のクリームと亀のワカメ。共に十年前に我が家の一員となった二匹はそれぞれ家族にかわいがられて暮らしていた。あの日までは……。朝からクリームはそわそわ落ち着かずにご飯もほとんど食べず、何かを訴えているかのようにそのまま外に出かけていった。そして……。

実家は流失。数日後に基礎だけになった実家の前に立ち、後ろの山に向かって叫んだが返事はなかった。被害状況が分かってくると叔父や親戚が行方不明になっていた。そんな大変な状況の中、動物が行方不明と言えなくなり、自分の中で胸にしまいこんでいた。

あの日から一年程経ってうささんの活動のことを聞き、さっそく絵画展に行った。話をして私の思いが伝わり、描いていただけることになり、うれしい気持ちでいっぱいだった。

それから釜石の絵画展で、たかぎなまこさんがつくった作品を見た。うれしくて思わず涙が溢れてきた。雲の上にクリームとワカメが仲良くいる！震災前のことがよみがえってきた。震災で失われた動物の命を絵という形で甦らせてくれた作家の皆さんに、ただただ感謝！だった。

家族の一員として一緒に暮らした動物だって大切な命だと再認識できた。命の重みは変わらない。愛情を持って育ててきた分、絆は強くなっていると思う。

最後に、絵画展を企画したうささんをはじめ、作家の皆さんに心からお礼を言いたい。動物を思う強い気持ちを絵で表していただいたことを決して忘れず、これからの復興に向けての力にして一步ずつ進んでいきたい。

「マルちゃん」

(絵：川浦 良枝先生)



飼主さんからのメッセージ

漉磯 信子さん（宮古市）

2011年3月11日あの津波でたくさんの命が、そしてわが家でも小さな大切な命が星になりました。15年前に1ヶ月でやって来た柴犬マルです。体もまんまる・大きな瞳もまんまるからマルと名前を付けました。

マルは小さい時からわんぱくでいつも私達を笑わせ大切な家族で宝物でした。

皆んなが大好き・海が大好き・自然が大好き・時々空に鼻をクンクンさせ春・夏・秋・冬と季節が変わるのを楽しんでいました。

マルはおやつよりも散歩が一番大好きで、どこまでも一緒に歩きました。きっと今でも星になり空の上をたくさんの友達と大好きな散歩をしているんだろうと思っています。

マルをあつ津波から助けてあげる事が出来ず、悲しんでいた私達に絵本を描いている人達がマルの絵を描いてプレゼントしてくれました。その絵の中のマルは生きている時と同じ嬉しそうに楽しそうに笑っていました。

空の上でも僕は楽しいよ、幸せだよ、たくさんの友達と一緒にいるよ、大好きな散歩をたくさんしているから心配しないでって言っているようでした。

マルの姿は見える事はないけれどもずっと嬉しそうに楽しそうに笑っているし、いつでもこの絵を見てマルに会えるし心の声を聞く事ができます。

あの津波で助ける事ができなかった命もあったけれど、助けてあげれる命もある事を私達に教えてくれました。

マルがいなくなり犬を飼う事は出来ないと思っていたら神様はあの津波で家族と一緒に暮らす事の出来なくなった7才の犬を私達にあわせてくれて今一緒に仲良く暮らしています。その犬もたくさんのこわい悲しいさみしい思いをしました。だから私達は助けてあげる事の出来なかったマルの分も季節を感じながら一緒に散歩し楽しみます。きっとマルも私達のそばでずっと今いる小さな命としっぽを振りながら歩いてくれると信じています。

「テン、マック、ミー子、アニキ、ゆめちゃん」

(絵：永盛 綾子先生)



飼主さんからのメッセージ

岩間 有希枝さん（大槌町）

私は、東日本大震災の津波で主人の両親、弟と、動物達を失いました。

あの日、たまたま釜石へ一人で出かけていたので、地震の後には子供達のいる小学校へ車を飛ばし、子供達と一緒に城山へ上るのが精一杯でした。

会社は鉄筋造の三階建てだったので、家族は大丈夫だろうと確信していたのに、津波は、家ごと私達から大事な家族をうばってしまいました。

テンという賢いダックスは目が不自由でした。マックというまだ若いシェルティはとても怖がりでした。ゆめちゃんというインコは籠の中でしたし、ミーコというオウムは昔覚えた歌を忘れるぐらいおばあちゃんでした。

この子達は、自分ひとりの力では逃げることはできません。どれほど怖くてつらい思いをしたのかと思うと、申し訳なくて可哀想で、今でもとてもたまらない気持ちになります。

もっと他に全員が助かる方法があったのではないか、こんな事になってしまってもともと動物を飼う資格がなかったのではないかといつもいつも思い、悔やんでいます。

災害は人間の力では防ぎようがありません。

どうすれば、こんな可哀想な事を防げるのか、他人事とは思わずに、常に考えて対策をとることが一番大事だと思いました。

私の子供達や孫達が、いつもその事を考えてくれるように、そしてあの可愛い動物達の事を忘れないように、絵を描いていただくことを決めました。

作家さんやご協力下さった方々に感謝しながら、いつまでもこの絵を大切に、震災で亡くなった全ての命が安らかに眠れるよう祈り続けようと思います。

大槌町 岩間有希枝

「カレンちゃん、ショコラちゃん、他たくさんの家族たち」

(絵：うさ先生)



飼主さんからのメッセージ

後藤 真美さん（大槌町）

「震災で亡くしてしまったこの子達を一枚の絵に描いてもらえる。」・・・
・ そう知った時も私の気持ちは重く、沈んでいました。

描いてもらった事で気持ちが救われてはあの子達に申し訳ない。あの日のあの子達の最期を思うと、どんなに怖くて冷たくて苦しかったかを思うと、私にも恐怖と苦しさがこみ上げ胸が苦しくなります。

毎日思い出さない日はありません。言葉は話せなくても全身で話しかけてくれたカレン達。運動より食べる方が大好きで、外遊びは外食の時間だった事。自由に遊んでいても名前を呼べば戻ってくる小鳥達。一人身になったコッピーとの同居でも、いじめる事なくユラユラ仲良しの金魚達。みんな本当に可愛くて優しく、私達の毎日に多くの喜びや幸せをくれました。写真も流され無いけれど、やっぱり描いてもらいたい・・・そう思えたのは、直接電話で「うさ」と話せた事がキッカケでした。そして初めて絵を目にした時、涙があふれて止まりませんでした。そこに居たのは間違いなくうちの子達だったからです。

「ああ、ここに居たんだね。探したんだよ。」そう思いました。絵の中のカレン達は、「お母さん、天国でみんなと一緒にいるよ。」そう話しかけているようです。「ごめんね。本当にごめんね。ずっと忘れないからね。」

絵は、この子達の思いを私に伝えてくれているかのようです。私もこの子達を思っています。それはこれからもずっと・・・です。

「東日本大震災津波で消えた小さな命を想う」

平成25年3月29日 発行

編集 岩手県沿岸広域振興局保健福祉環境部
〒026-0043 岩手県釜石市新町 6-50
Tel 0193-25-2702 Fax 0193-25-2294

印刷 釜石プリント合同会社
Tel 0193-25-0651

